

宗教的行動的表現

『十住毘婆沙論』における「易行品」の前景

本 多 弘 之

はじめに

69 (本多)

『大無量寿経』の論である『願生偈』を釈するに当たって、冒頭に『華嚴経』十地品の釈論たる『十住毘婆沙論』を引用して、論を解釈する立場を明確にされたのが、曇鸞大師の『論註』である。難行易行の決判によって、仏道を現前に明らかにした意を汲んで、論釈の主體的立場を見抜き、十地の論に、『大経』の伝統を見出した眼を、親鸞はより判然とさせて、「行巻」に引用されている。そこには仏教を問う態度と、仏道の歴史に対する深い感動があるに違いない。表相に現ずる大きな差異にも拘らず、その底に透徹した人間凝視と、熱烈な求道心の内面的深化に気付き

得れば、『大経』の伝統が「十地品」の釈に出て来ることは、何も不可能なことではなからう。

しかし、經典の真言に素直に耳を傾け、その真意に参入せんとするものが、その根本的探求の立場をその經典自体の中に見出さないということが、果して許さるべきものなのであろうか。論といっても『十住毘婆沙論』に限らず、造論によって經典に自己を問うということ、それによって一切衆生の救済の道理を明らかにしようというのが、論者の意図であれば、帰敬序あるいは、序に作意を述べる部分において、何故にその経論を扱い、またその経論に対する自己の態度が何如ようであるかが述べられるべきであろう。親鸞によれば、『十住毘婆沙論』は、「易行品」のみ

というのでなく、「入初地品」「地相品」「浄地品」等からの引用によって明白な如く、論全体が大行を明らかにするものであるとされている。これはこの『論』全般を皮相的に読んで云えることではないことは当然であらうが、単に自己の論調に合わせるための曲解でもないことは、『論』そのものを通読しても感じられることである。

今、この小論は、『十住毘婆沙論』の論旨に添いつつ、易行道を必然とした龍樹の意を、少しく探って見たいと思うものである。

一

論の初め、「序品」の頭初にいう。

敬_下礼一切仏 無上之大道

及諸菩薩衆 堅心住_三十地_一

声聞辟支仏 無_三我我所_二者_上

今解_三十地義_一 随_三順仏所說_①

仏説に随順せんが為に十地の義を解すといつて、その意味を解説するのであるが、この中にすでに大きな問題を提示している。「敬礼」の内容は三宝であることは云うまでもないのであるが、菩薩十地の義を解せんとするに当って、声聞、辟支仏を敬するということは如何なる意味を有

するのか。この当面の問題に論主自ら問答を起して、詳細にその意味を展開する。生死の大海に旋流し、無明の黒闇に沈み、煩惱の定まりなき此岸を越えることのできない衆生の為に、「菩薩十地の義」を説くのであるが、若し菩薩十地を修行することが出来ないならば、如何にしても生死の海を度することは出来ないであろうかという問に対し、

答曰若有_レ人行_三声聞辟支仏乘_二者是人得_レ度_三生死大海_一

若人欲_下以_三無上大乗_一度_三生死大海_一者是人当_レ具_三足_二修_三行十地_②。

と云つて、一応生死の大海の超越には十地が必然であるというのではないが、無上大乗という課題に対するならば、これを可とせずんば能わずと、断言する。ここに人間存在における苦悩の深さと、それを超えることの難かしさが表出されていると見ることができよう。真に人間の全存在を賭して、菩薩道を成ぜんとするならば、この十地の義を解説せねばならぬとする論主の並々ならぬ意欲が、ここに感得されるわけである。尤も「序品」における声聞辟支仏の意味はよく分らない所があつて、それが後に論主自身の中で熟して表現されてくるのであるが、ここでは、生死を度するといふ課題に対しては一応差別なく敬礼すべき求道者とされるのである。ただ注意すべきは、問題の解決と、そ

の方法に大いなる差を指摘している点であろう。

我等何用於三恒河沙等大劫。往三來生死一具足十地。不レ如下以三声聞辟支仏乘二速滅諸苦。

答曰。是語弱劣。非三是大悲有益之言一……乃至……汝所說者則断三宝種二非三是大人有智之言一不レ可三聽察。

と云つて、先には無余涅槃に何の差別もなく、俱に到彼岸するといいながら、その方法に於て、安易を取らんとする態度そのものに対しては、三宝の種を断ずるものであるという極めて敵しい叱咤の言葉を吐かねば止まない。一切平等に苦悩の衆生を度せんが為の経説であるから、誰でもが出来る安易なる道を説くのであろうという期待は、已に仏道を忘れたものであるばかりか、仏法を滅ぼすものであるというのである。全く許すべからざる考えであると決めてつけている。しかもなおこの生死無常の苦悩の中に、人間の弱心をもつて発心せんとする困難を認めて、「其軟心者見三此諸苦何得不三怖求声聞辟支仏乘」と云つて、実存的苦境は樂觀できるようなものでないことを充分に認めているのである。されば、この生死の苦を人間として忠実に克服せんとする道はどこにあるか。それこそ今当に説かんとする菩薩十地である。従つて造論の意趣を判然と示して曰く、

我為レ欲三慈悲 饒三益於衆生一

不如下以三余因縁一 而造於此論上

見下衆生於三六道二受レ苦無も有三救護。為レ欲レ度三此等故

以三智慧力二而造三此論。不レ為下自現三智力一求於名利上

無量恒河沙大劫を俟つて仏道を成ぜんとするような無上

道を明らかにするに當つて論主はどこまでも自利・利他円

満を求めんとする。衆生というも、実存に苦悩する人間た

る自己を離れて存するわけではない。どこまでも自己の上

に十地の義を明示することが、同時に一切人類の仏道とな

るべきものである。造論は文辭を飾らんが為でもない

く、名利の為のものでもない。深く我等の実存的苦境を見

つめ、その解決を念ずることが先決である。造論は自己の

仏道理解の表現でなければならぬ。曰く、

思惟造三此論一 深発三於善心一

以然三此法二故 無比供三養仏一

我造此論時思惟分別多念三三宝及菩薩衆二又念三布施持

戒忍辱精進禪定智慧故深発三善心一則是自利又演三説照

明此正法二故名為三無比供三養諸仏二則是利他。

仏法そのものは云わば仏説によりて充分に説き証されて
いる。にも拘らず、自分が論を造るのは、その仏法を自己
により明らかにし更に、根機に応じて理解しうる縁とも

ならんとするに由るのであって、造論そのものが、仏説の目的たる菩薩道の展開を引受けた結果であるという。ここに宗教的実践における「表現」の意義が端的に語られていく訳であるが、自己の全身全霊を以て「思惟」する道そのものが、無量劫をも耐え抜く菩薩道たらんとするものである。しかもそれは、菩薩十地を、必当具足せねばならぬといういわば至上命法の下に、三宝に敬礼するところに始まる道であるとする。そして「序品」を結ぶに当っては、

我說十地論一 其心得清淨一

深貪是心二故 精勤而不倦

若人聞受持 心有清淨者

我亦深樂レ此 一心造三此論^⑧

と述べて、表現を通して自己自身の中に得た清淨心を、「深貪是心」とまで云って、十地の義への帰敬を表わしている。

従って、論主の造論の立場は、どこまでも十地の義たる仏説に随順して、人間の実存的なる課題に応答し、単に「生死を度」するのみでなく、人間の人間たる所以、人と人との間にむしろ自分から飛び込んで、その苦悩の唯中において「清淨心を得」んとするものである。しかしその立場は、親鸞が「行巻」に明かにするようなものを、どこに

潜めているのか未だ明白ではない。二乗の道を選ばないという根本的決断において、人間としての人間存在の荷負の態度を方向づけているとはいえ、また有限なる人間の弱さと実存的苦境への理解を表明しているとはいえ、無量劫を尽しても無上仏道を歩む志願を、十地の義の上に学ばんとする限り、「易行品」を必然とする要因は未だ瞭然たらざるを得ない。弱勢の凡愚を叱咤激励して、無上道へ歩むことを以て、実存の真の課題に取り組み、共に三宝の種を継がんとする、いわば自力聖道の論疏たるものの如く読むのが一応は無難のようである。しかし論はこれからはじまる。親鸞の引用もさすがに「序品」には及んでいない^⑨。論主の人間存在への了解と、実存の問題への態度は、初地の具体的課題にぶつかることによってのみ表明されるものと云うべきなのであろう。

二

ここで思い合わすべきは、『華嚴経』の「十地品」に於て、説者金剛藏菩薩が十地の義を説くに当り、この法が難思議にして微妙なるが故に、沈黙せざるを得なかったということであらう。『華嚴経』それ自体が広大なる三昧の世界、自受用法楽の境地たる廣大如法界究竟如虚空より説き

出されている上には、ここに新ためて沈黙をせねばならぬ必要はないと考えられるのであるが、十地の名を列挙して、諸仏の国土であれば十地を説かぬものではなく、十地は菩薩最上の妙道であると述べた後の沈黙は、単に聴衆に聞法への「渴思甘露^⑧」をうながす為のものというようなことでなく、「我念^⑨三仏智慧^⑩」第一難思議 衆生少能信 是故我默然^⑪」ということに深い意味を見出すべきではないかと思う。初地を説き出さんとするに当って、仏力を承けて説くのであるから聴くものは恭敬にして「咸共一心聽^⑫」と要請し、しかもその上で更に、「我之所説者 如大海一滂^⑬」という教説そのものの分限を表明しているのである。経自らがこの十地の義の重要な意味と、その仕事そのものの分限を表明していることは、龍樹菩薩の初地解釈を読むに当たっても、充分考慮すべきであると思う。背景に善財童子の求道における普賢の教えを読み取るべきであるとする教示^⑭も、この默然たる思惟の底に於て、広大なる法界を言い当て、我ら衆生に仏道を実現せしめんとする熱情と慈愛を、たとえ一滂にても掬するならば、誠に道理あるものとして受け取るべきものになるのではなからうか。

それはまああせておくとして「入初地品」に於て初地の相

が略説されるのであるが、そこに出来る問題は幾つかあって、論世自らそれに答えていく。初めに、偈を挙げて、それを釈していくのであるが、その中で注意すべきことが三あり、一に行について、二に深心について、三に初地の名たる歡喜についてであると考えられる。細かに云えば更に色々論ぜられようが、大別してこの三つの問題に包括できると思う。

初めの行については、さして問題となるべきこともないが、宗教的行の問題として、当然のことながら、

善根^⑮、為^⑯衆生^⑰三故求無上道故、所行善法皆名^⑱善根^⑲。

と押えてあるところに、一応は善行とか持戒といいつつも、そういう人間的諸問題を一貫した究極的な道、無上の道の表現としての行の課題が提出されているようである。「信解無上法^⑳」と指示する如く、初地の行といっても、単に初歩的な修練というような便宜的なるものではなく、根本において無上道の自己限定でなければならぬことは言を俟たない。しかし宗教的自覚を一応、十段階の求道の歷程に分けたところには、それぞれの段階に相当する行が一応は云われうるのであるが、その問題は当面の小論の課題に直接するものでないと思われるので置くことにしたい。

次に深心についてであるが、

此十住經 地地別説ニ深心相一 是故菩薩隨諸地中皆
得ニ深心一 深心之義即在ニ其地^⑤。

ともあるように、十地の全てにわたってそれぞれに深心が説かれ、宗教心の深化が見出されるのであるが、この初地の宗教心における意味は次の如くである。

今初地中説ニ深心一 一者發ニ大願^⑥ 二者在ニ必定地^⑦。

この二つの問題が広説されて、一は「積願品」「發菩提心品」を展開し、また一は「阿惟越致品」「易行品」へと展開するのであるが、この「入初地品」中に於ても、重大な問題として提起されている。

それは、十段階の一分における宗教心が、何故に無上道たることを証しうるかということである。

發願我得ニ自度ニ已当^⑧度ニ衆生者一切諸法願為ニ其本。

離^⑨願則不成是故發^⑩願……乃至……又以^⑪何心一能發^⑫是願。答曰得^⑬ニ仏^⑭十力^⑮能成^⑯此事^⑰入^⑱ニ必定地^⑲能發^⑳是願^㉑。

願は菩提に対して因であり、仏力は仏果の徳のはたらきによるものであるから、この問題は、宗教的要求とその成就との間の絶対的矛盾ともいべきものを、如何にして超克しうるかという、求道の最大の難関に関するものであ

る。仏の十力を得て初めて必定地に入ることが出来、また能く發願するというならば、出發点が果位において与えられるということになる。何らかの意味で果位というものを有たない因位ということをも、初めから予定しないというのが龍樹の立場であるといえる。しかしその次に続いて、十力の意味を積した後で、「為^①得^②如^③是仏十力^④故大心發願即入^⑤ニ必定聚^⑥」と云っている。「為得」という文字自身がこの原文あるいは翻譯者鳩摩羅什において如何なる意味を有したかは、浅学の愚生には知りうべくもないが、先に「為」という字を使わずに、「得^⑦仏十力能成此事入^⑧必定地^⑨」と云い、この十力を解釈した後において態々これを加えたことと、これに続く問答において、「即入^⑩」に二義を加えていることから推して、常識的に「得んが為の故」と字訓しうる面と、「得たるが為の故」と訓むべきような面の二義を認むべきであると考える。この辺の論主の説得の仕方には、『中論』などの超常識的論法とも云うべき否定道の嚴肅さは見られず、非常に柔軟性に富んでいて、ややもすれば、格調が低いようにも読み取れる。しかし再考すれば、ここが仏道の仏道たる所以のところであって、単に因から果へとという無謀であつてもならず、また単に果から因へという独断的乃至ドグマティックな思想でもなく、その

両面を同時交互に包含して、しかも有限なる人間の上に、苦悩の衆生の上に、必定の地を成就しなければならぬという困難なる使命を、明らかに説き尽さんとする論主の深慮であるとするべきなのであろう。この次の問答と先に云ったのは、菩薩は初発心のとき即ちに必定に入るといつても、全ての場合にこれが云えるのかという問であって、それに対し、「定答」すべきでなく、悉く必定に入るとは云い得ない、釈尊の如きは燃燈仏に値うことによって始めて必定に入ったのであって、「一切菩薩初発心便入必定是為邪論」と云うべきであるとするのである。しかも何故「以是心入必定」と説くのかという問に答えて、

有菩薩初発心即入必定以是心能得初地因是人一故説初発心入必定中。

という。これも文の当相の分り易いのを反して、また曖昧な意味を有する発言である。文の当相から云えば、初発心即入必定の菩薩は、一部ではあるが、その菩薩について云ったのであると説いている。しかし、例え釈尊の場合であっても、必定に入るといふ事実が成り立つ時には、「得仏十力能成此事」といふ原則に則らなければならぬまい。少くとも、全ての菩薩、諸仏がこの十地によらざるはないと断言しうる以上、入初地を成立せしめる深心の「発心・入必

定」が無ければならない。しかも「問曰。得何利一故能成此事入必定地」という問の答としての「得仏十力」であるから、明らかに論主は、難の意図を汲みつつもその問題を本質的ならざるものと洞察して、喝破するに「有菩薩」というような表現を取ったものと思う。つまり初発心以後の時間とか、求道の形式が問題なのでなく、発心の質というか、深心の内実が問題とさるべきなのである。「有菩薩」というような曖昧な表現は、問うものへの教育的配慮があるものと考えるしか方法がない。邪論を避けて、しかもこの困難な成仏道の最大課題を説く為に、「有菩薩」と云わざるを得ぬのであろう。しかしたった一人でも「初発心即入必定」が成立するならば、因果の呼応がそこに成就するのでなければならぬ。仏の十力を得て必定地に入つて発願しうるものが、初地といわれる宗教的自覚の内容なのである。菩薩初地に立つということが文学的乃至は物語り的な文飾でなく、宗教的事実の表現である為には、人間の努力というか、世間的真地面さというか、単なる善意による行為の積み重ねでなく、無上仏道の力に与るのでなければならぬ。

更にこの初発心について、「是心不雜一切煩惱」、「是心無動能攝正法」等の八相を挙げその理由を三十三は

ど数えている。その理由の中で一応眼を魅くのは、「是心難見一切衆生不能親故」「是心根深悲心厚故」の二つであろう。無量の功德の初地を莊嚴する中に、論主の明かにせんとする仏法を恒問見るような心地がするのである。

『論』は次に「生如来家」の問題となるのであるが、親鸞の『教行信証』の引用はこの部分から始められている。

この位置は、「入於必定聚」則生如来家」と偈にあるように、宗教的探求の課題としては、入必定聚と同質のものではないかと思うのであるが、生如来家という表現を取る時に、一層問題が明確になるのであると思われる。その故に論も、如来の意義を色々に表現し直すことにより、求道的意味としての如来を云い当てようとしている。そしてそれを締めくくって、

今生菩薩行如来道 相續不断故名爲生如来家
又 是菩薩必成如来 故名爲生如来家。

と云う。菩薩が、如来の道を行くに断絶することなく、必ず如来と成ることを、生如来家というのである。そして論は、この「家」に非常な注意を払って、色々な解釈を加えるのであるが、これは偶然なのかどうか分らぬが、家の意味を解釈するのに「有人言」といつている点に注目しておいて良いのではないか。この「有人言」の一句である

「般舟三昧及大悲……」を親鸞は引用されて、これを大行の表現であると読み取られたのである。勿論、そこには紙背に徹する眼光と、求道の深まりによってのみ言いうるような境地もあるのではあろうが、「家」に「生」れるという譬喩的表現と、先に考えた如き、宗教的な因果の呼応ということを思い合せるに、論主が「家」の釈に「有人」と言いつつ、そこにこそ真に言うべきことを云ってあることと、先に「有菩薩」と云ってあることとの間に、何か必然的な内面関係を感じるのも無理ではないであらう。

有人言般舟三昧及大悲名諸仏家 從此二法生諸如来。

この家に生れることによって、この家が清浄なるによって、菩薩が過咎なく、もし過咎あればそれを転じて、出世上道に入ることができるのであると。「転於世間道入出世上道」が、この家において成立するのであると。ここに更に非常に貴重な一言がはさまれている。

入者正行道故名爲入。

転入というも静的なるものに帰するのでなく、入によって動的求道が始まる。正しく道を行ずることが、入であるとは、「入初地品」の釈を終えるに相応しい言であるという外ない。凡夫道を転じて、出世間道に入ることが、家の

徳として表現されるということも、暗示する所多きこと云うまでもない。

「入初地品」の最後は、云うまでもなく、初地を歡喜地と名づけることで結ばれる。ここを「行卷」に詳細に引用されるのである。ここで、親鸞の訓点に特異な点があるのであるが、此論の主題からいささか外れるので触れないでおきたい。

三

①

「地相品」は、歡喜と名づけられた初地の相を述べてある。先ず七相をもって、初地の特徴を語るが、特に清淨とということが、後に広説されるところからも注意すべきところであろう。この清淨について、「有人言」と言つて、

有人言 信解名為_ニ清淨。有人言堅固信心名為_ニ清淨。

と述べ、この信の意義を次の「淨地品」に展開するのである。

論は一応七相を以て語つた後、歡喜について、「以何而歡喜」と、いわば歡喜に付随する相ではなく、歡喜の成立根拠を問う。この部分を親鸞は引用しているので、ここに新たに全文を引用することは省くが、重要なポイントが

あると思われるので、やはり一言触れて見たい。

以何而歡喜 答曰

常念_ニ於諸仏 及諸仏大法 必定希有行_一 是故多_ニ歡喜。

偈のみの当相によれば「常念」の内容は、右の如く仏と法と、行とを考へるようであるが、論主自らの解釈する所によれば「心定希有行」とは、「念必定諸菩薩」と「念希有行」の意味であつて、三宝と必定の菩薩の所行の法とを念ずるが故に、心多歡喜といふのである。つまり、仏法僧と希有行とを念ずるのである。そして「念希有行」とは「念必定菩薩第一希有行」であるといふ。この「必定の菩薩」は明らかに「第一希有行」の限定句であつて、「必定の菩薩」の（行ずるところの）希有の行を念ずるのであるといふのである。これを親鸞は、歡喜の成立根拠を充分に説明するためには、三宝を念ずることに付属したような形での「念希有行」といふのではなく、三宝を念ずることと同格に、「念希有行」が云われていると読み取つて、
常念_ニ於_ニ諸_ニ仏_一及_ニ諸_ニ仏_一大法_一 必定_ニ希_ニ有_ニ行_一

と訓まれている。誠に当然のようであるが、余程、たんに読むのでなければ、こういうことは出来まいと思う。念諸仏について、然燈等の過去の諸仏、阿弥陀等の現在

の諸仏、弥勒等の将来の諸仏を常に念ずること現在前の如しということがあって、この問題が「易行品」の伏線であることが思われるのであるが、論の文に即すれば念希有行は二義を含んでいて、必定菩薩の第一希有行を念ずると同時に又、「念十地諸行法」であるという。論主のどこまでも十地に即して十地の義を真に発揚せんとする意図が窺われるのである。

次に論は歡喜の成立の条件というか、そういう意味で歡喜に対照する概念として「怖畏」ということを挙げ、怖畏なきが故に歡喜多しという。ここには根本的に畏れの生ずる原因を我我所にあると押え、その払拭に、いわば『中論』的な論理を出している点に気づかされる。「空無我法能離諸怖畏」故菩薩在「歡喜地」と云って「地相品」が終っている。

①

「淨地品」はその名の如く、実践的な宗教生活の内容としての初地の意義を明している。初地を得て云何にして修治するかというのがこの「品」の命題である。

ここで注意すべきは、先ず「信力転増上」であって、親鸞もここを引用している。その中で、

菩薩入三初地得諸二功德味一故信力転増。以三是信力一
籌三量諸仏功德無量深妙二能信受。

とあって、信力転増によって初地に入るのでなく、初地に入ることによって信力転増し、仏の功德を信受することができるとしている。ここにもまた「入初地品」にあったと同じような問題が感じられる。信力転増は、入った後つまり正しく道を行ずることによって為されうるというのであるが、この信力によって、また仏の功德を量り信受しうるといのであるから、因と果とは、互に作用しあって、転増していくのである。このように、生如来家の事実によって如来の功德を信受する信力が増上するというような考え方は、求道者の柔軟にして謙虚な態度と共に、必定という自信というか確信がなければなるまいと思われる。偈に二十七の淨地の意義を挙げているのであるが、その中でもこの「信力転増上為レ首」と論主自身が云われる如く、信力増上ということがこの「品」の中心課題であると思う。何故に「地相品」にすでに空無我というような理を説いて後、信力転増というようなことを淨地の主要問題とするのであるか。この疑問に対しては論主が「難治而能治」ということを云っているのがその手懸りになりそうである。これを自ら積する中に、初地の菩薩は勢力が弱いので心の調

伏が不全であり、「諸煩惱猶能為患」の状態であって、魔が障礙するから、「此地為難治」というのであるとある。^⑥ 誠に実践的であるといふべきなのであって、諸仏の家に生れ、仏の十方に与ることによって初地に入るのであるが、しかもなお煩惱に患わされるような位であるから、信力転増ということが無ければならないのであると。しかもそれは初地に入ってから難という意味において、難はどこまでも宗教的問題としての難である。「樂^一出世間法^二不^レ樂^三世間法^四」であって、出世間的なる次元における求道が、世間法に犯されるというようなことは、論理的には無いわけであるが、具体的生活における人間の求道心は常に魔の犯す所となる可能性を孕んでいる。これを超えさせるものは、仏道に対する信頼、より厳密に云うならば、第一希有行に対する信による外はないということなのであろう。信を首とする二十七法によって淨地を成就する。それによって仏道を成就せしめるのであると。「信等法能令人成^二仏道^三」と云われて来ることは、深く思いをいたすべきところに相違ない。

①

「入初地品」において、初地の深心は發大願と在必定地

であると述べたことを受けて、初地成立の本である願を検討せんとするのが、「積願品」である。「十地品」の上でも、「安住歡喜地發諸大願^⑦」とあって「淨地法」を説いてから願を説き出している。これに則って積される訳であろう。論主は、十大願を積しているが、今、その願の一々について検討する心要はない。一つ注意すべきは、三世十方の諸仏を守護せんという願に対して、過去の諸仏は已に滅し、未来の諸仏は未だ出ず、どうしてそれを守護することができるかという問に対し、

過去未來現在諸佛法皆是一体一相。是故若守^三護一仏法^一則為^レ守^三護三世諸佛法^⑧。

と答えていることである。一切仏を真に敬し、一切仏の法を真に護持するとは、一仏を敬し、一仏の法を恭すること、がその必要充分条件となるのである。諸仏の法というも、皆、一体だからであるといふのである。滅したるもの、未だ無きものを、本當に貴ぶことが出来るのは、現前の一仏を如何にするかによって決る。大乘仏教の根本的思想たる所以がこの辺に見出されるのであろう。現前の仏道こそが、我等の課題である。

第七願に「願淨仏土」が説かれている点も一応注意すべきであらう。種々の不淨を挙げ、その不淨を転ずれば淨土

であるという。そして、「是淨国土當_レ知隨_レ諸菩薩本願因緣_②と積して、ここでは、菩薩の本願のはたらきによって、淨土が現するものと略説している。図式的に云うならば、諸仏の家の中で、家を掃除するところに淨土が現するというわけである。この第七願のところに、仏功德力ということ、つまり初地に入るについての大前提の問題が少しく積されている。

仏功德力者一切去來今仏威力、功德智慧無量深法、等無差別_①、但隨_②諸仏本願因緣、或有_③壽命無量、或有_④見者_⑤即得_⑥必定、聞_⑦名者亦得_⑧必定……後略_⑨。

諸仏の本願の例として、無量壽、無量光の因位果上の功德が語られてくるが、光に遇って女身を転じたり、光明に遇って苦惱皆滅とかと、光明のはたらき、功德力を積している所には、「易行品」を出さずには止まぬものを感じるのも無理でない。特に、

衆生遇_①光即能念仏 念仏因緣故念法 念法故諸蓋得_②除_③。

とあるところなどは見逃し得ない箇所であろう。

①

続いて「発菩提心品」「調伏心品」が置かれている。宗

教的自覚としての初地に立って、願が起るのであるが、その起って来る因縁に根の深さを区別して、「根本深」きものは発心が成就することができると、「根本微弱」なるものは成ずることが少い。必ず成就することができるのは根が深いものであるというのが、「発菩提心品」の意図であって、根の深きものに三、根の浅きものに四の因縁を挙げている。何が成就し、何が成就し難いかという発心の性状を区別しているということは、何でもないことのようにはあるが、根本の深さによって分けているという所に注目すれば、発菩提心ということに、深さを見ているということが窺われ、これは徹底すれば、親鸞が淨土の大菩提心というような表現を取ってくるような素地であると見ることができると思う。当相は菩薩発心の因縁という形式的弁別ではあるが、起された願の性格を云々するのでなく、発心の因縁という形によって、根の深さを教えんとすることは意味あることと思われるのである。

「調伏心品」は名の通り、菩提心を調べ、菩提心を忘失することを伏していくについての具体的修行を語っている。当然そこから菩提心を失せざる境地というものについて、「阿惟越致品」が説き出される。

ここで、菩薩というも、一、惟越致と二、阿惟越致の二

種があると言つてその二を解釈する。

この阿惟越地は、「於阿耨多羅三藐三菩提不_レ退転_一不_レ懈廢_二」^⑤といつて、無上仏道より退転しないことであるが、その相について五を数え、その第一に「等心」を挙げている。

等心衆生者衆生六道所撰於_二上中下_一心無差別是名_二阿惟越致_一^⑥

つまり初めから上とか下とかいうことが無いならば、落ちて見ようがない。地獄であろうが天人であろうが、差別はないとなれば絶対に退転しないというのである。逆に云えば上下あればすでに退転せるものである。ここに、何らかの努力とか精進の現わさんとするものが、上に登ることなどではなく、真の平等を達成せんが為なること、本来平等を発見せんが為なることを知ることができる。

しかし、それは、何でも良いという投やりなものでは勿論ない。敗壞せる相の中に「好_二樂下劣法_一」^⑦ということを言ひ、等心といつても、下劣法を楽しんではならぬと誠める。下劣法とは、「除_二仏乘已余乘比_一於_二仏乘_一小劣不_レ如故名_二下_一」^⑧ということが第一であり、また悪事ということも当然、下であるが、菩提心に立つての問題は、二乗心であるとすると。六道を等心に見るとは、仏乘に立つということ

である。六道の何れかに立つて平等だというのは敗壞の相に墮する。のみならず六道を超えるにしても、超え方が大問題なのである。二乗の超え方は悪ではないが、下劣であるという。「序品」でも述べたところであるが、仏道にあって、二乗ほど密接であつてまた落ち易い道はない。二乗を信樂するのは、「雖_レ樂_二上事_一……乃至……遠離大乘故亦名_二樂下法_一」^⑨といつて、六道を超え、生死を度脱していても、衆生の存在性たるあいだ性、つまり自が利することが同時に他を利することになるような超え方でなければ、真に衆生が衆生の本来性へ帰ることはできないとする。たとえ無量劫を費すような困難が待っているにしても、その一点を失うことは、下劣となる。形は、人間であっても、また表向きは求道者であっても、それは救い難い退転であり、人間の用(間に互に依つて生きるというような用)を失うものである。つまり、

敗壞菩薩敗壞名_二不調順_一。譬如_二最弊惡馬名_二為_二敗壞_一但有_二馬名_一無_レ有_二馬用_一。敗壞菩薩亦如_レ是。但有_二空名_一無_レ有_二實行_一^⑩

と云うのである。しかるにそれを克服するに至つて、阿惟越致の相貌たるや、

若菩薩觀_二凡夫地声聞地辟支地_一不_二二分_一別無_レ有_二疑

悔。当知是阿惟越致。^⑤

と云つて、一初衆生の本来平等の世界を開示するのだければならない。これを得ることが仏道の出発点であり、また究極でもあろう。「一心聽法常欲在^レ前^⑥」ということに示されるように、また、

常願見^レ仏聞^レ他方現在有^レ仏願欲^ニ往生^⑦。常生^ニ中国^一。終不^ニ自疑^ニ我是阿惟越致非^ニ阿惟越致^⑧。

というように、聞法求道のところに開かれる外ない。これが、「易行品」に入つて、

至^ニ阿惟越致地^一者行^ニ諸難行^一久乃可^レ得^⑨。

と提示されてくる課題なのである。

む す び

以上の如く、『十住毘婆沙論』の論旨に添つて愚生のノートを作つて見たのであるが、「易行品」は、突然第九品として出されたのではなく、成仏道の課題としての阿惟越致を、論主自身が明示し、一切衆生と共に現前に聴法するところに必然的に積されて来たものであることが了解できる。しかも、他の論旨から別開されたというようなものではなく、「十地品」が、初地を第一歩として始まるための、究竟仏道が必定するための、論主にとっての不可欠の道で

あることが明瞭である。確かに表向きは、聖道的発想と、それまでの仏教の学問的、求道の業績を受けてはいるが、自己の成仏道の理解を通して、十地を現前せんとするところに、無限なる弥陀を念ずるといふ、自己の仏道の立脚点が教示されずば止まなかつた。「易行品」が欠けるなら論主にとって、阿惟越致は不可能となり、結局するところ、十地の教えも反古となるとさえ云いうると思われるのである。我らはともすれば、「易行品」が何か他の要因によって挿入されたように理解しがちであるが、厳密に論を読めば、上記の如く論主の意図が一貫していること驚くべきものである。本来なら「易行品」そのものの意味も検討した上でこのようなことを発言すべきところであるが、今は未だ研究不足なので別の機会にゆずりたい。(本学助手、真宗学)

註

- ① 大正藏二六卷八以下同V二〇頁^a
- ② 同右
- ③ 同、二〇頁b
- ④ 同、二二頁a
- ⑤ 同、二二頁b
- ⑥ 同、二二頁c
- ⑦ 和讃の「生死の苦海ほとりなし ひさしくしづめるわれら
- ⑧ をば 弥陀弘誓のふねのみぞ のせてかならずわたしける」

とあるのは、此の序品によつたものであると易行院師は云つておられる。真宗全書『易行品講纂』一三頁参照。

⑧ 大正蔵九卷五四三頁a、あるいは『十住経』(鳩摩羅什訳)大正蔵十卷四九八頁c参照。

⑨ 同九卷五四三頁b

⑩ 同五四四頁b

⑪ 同右並びに大正蔵十卷五〇〇頁b参照。

⑫ 曾我量深著『伝承と己証』一四〇頁並びに、『華嚴経』(般若三蔵訳)大正蔵十卷八九八頁bの「速往無量光仏刹云々」を参照。

⑬ 大正蔵二六卷二二三頁b

⑭ 同二三頁b

⑮ 同二四頁a

⑯ 同右

⑰ 同二四頁b

⑱ 同二四頁c

⑲ 他の場所にも明らかに後者の意味に訓むべき場合がある。一例として次の如し。

為得諸功德故歎喜為地 (二六頁b)

これを「得ンガタメ」と訓むにしても、「得ようとするため」というより「得たるがため」という意に読み取れるであらう。

⑳ 大正蔵二六卷二四頁c

㉑ 同二四頁b

㉒ 同二四頁c

㉓ 同二三頁a、b

㉔ 同二五頁a、b参照。

㉕ 同二五頁b

②6 大正蔵三六卷二五頁c

②7 同右

②8 同右

②9 同二六頁b

③0 同二六頁b

③1 親鸞聖人全集(全集刊行会)『教行信証』一卷二六頁

③2 大正蔵二六卷二六頁c

③3 同二八頁c

③4 同二九頁a

③5 同三〇頁a

③6 同二九頁a

③7 同三〇頁a

③8 同二九頁a

③9 同三〇頁b

④0 大正蔵九卷五四五頁b

④1 大正蔵二六卷三〇頁b、c

④2 同三二頁a参照。

④3 同三二頁c、三四頁b

④4 同三三頁a

④5 同三八頁b

④6 同三八頁a

④7 同三八頁b

④8 同三八頁c

④9 同右

⑤0 同右

⑤1 同四〇頁a

⑤2 同四〇頁b

⑤3 同四〇頁c

⑤4 同四一頁a